

海上警報より

せかいの深呼吸が

にじんだこの輪郭からあふれていく予感で  
いっぱいなのは

切り倒された感情の大木から

荒削りの 名付けようのない舟が

丸ごと

あらわれてきたから

瞬きのたびの緑の痛みを

もう誰にもゆずりたくないのは わたしは二度と  
生まれてはこないと確信したから

ようやく空っぽだと知った、つかのま

はっすること、息を吸うこと

瞬間、せきをきって丘のように続いてくれ

はるかなロボの背中を

呼びさます、記憶よりふかいしずくよ

しみだす乳のまどろみから

雪解け水とかけおりてくれ

海上の母と娘も 折れたオールでそっと添え木した

後ろ足のそばで

オシッコくさい毛布にくるまって眠っていて

車上荒らしを目撃した日みたい

絵空事さえ

こんなにくっきりやってきている

声はでないけど

腐り、芽ぶく舟が

血管にも 細胞にも 歳月をつれて

かけもどってくるから

いいかい かじかむ手のひらにあるのは

灰色の胴体に潮風がぶつかり

附着していく塩

をこすりおとす感触

重いだろう背中の濃紺の絨毯にも

陽射しがあたり

あたたまり

疲れとよろこびがしたたっている

そのとき

きみの息子になって ひろった丸木舟を

耳におしあてていた

等高線までのぼってきた巨大な春に

帰宅を忘れ

鼻水を拭ったレシートの、さらわれた方角に

真正面から 眼をこらすほど

立ち去れ

と告げられて

動揺だけ前を向いていた